

『だれかの隣人となる』

聖書箇所「ルカ 10 章 25 節～37 節」

2026 年 4 月 26 日

聖書箇所「ルカ 10 章 25 節～37 節」 パワポ

挨拶

おはようございます。まだ、はじめましての方もおられるかもしれません。改めて少しだけ自己紹介をさせていただきます。私は 3 月中旬から土浦めぐみ教会で、伝道師、教育主事として仕えさせて頂いている山岡浩之と申します。どうぞよろしくお願い致します。

就任してからまだ一カ月ですが、ここまで色々なことがありました、これから働くぞと思ったら携帯電話のメモリーがすべて消えたり、自転車を頂いて助かったと思ったらいつの間にか自宅の駐輪所から自転車が消えていたり、おなか一杯食べて満足したと思ったら食あたりで苦しんだりと大変でした。

けれども、土浦めぐみ教会の多くの方々が助けて下さり、今は働きに集中できる環境が整えられています。皆様のご愛に感謝です。今後とも祈り励まし支えていただきながら、この働きに謙遜に励んでまいりたいと思います。

挨拶はここまでとさせて頂いて、ここからは「善きサマリア人のたとえ」と呼ばれる箇所から、みことばを共に聞いてまいりたいと思います。それでは 25 節から共に読み進めてまいりましょう。

25 節～28 節 イエス様との対話

25 節前半「さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。」

律法の専門家とは、律法を人々に教える教師のことです。彼らは聖書に書かれている律法を解釈し、どのように生活に適用するのかということを人々に教えていました。この律法の専門家が、イエス様の聖書理解を試そうとしてこのように言います。

25 節後半「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか」

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネの福音書 14 章 6 節）と言われた、イエス様にこのような質問をするなんて怖いもの知らずの人だと思いますが、イエス様はこういう大胆だけれども真理に関する質問には、真剣な応答をして下さいます。

26 節「イエスは彼に言われた。「律法には何と書いてありますか。あなたはどのように読んでいますか」」

これは一見すると質問に対する質問で答えをはぐらかしているように見えますがそうではありません。イエス様は一方的に教えるのではなく、まず「あなたはどのように考えていますか」と、律法の専門家が永遠のいのちについて、どのように理解しているのかを対話を通して知ろうとされたのです。この質問に対して律法の専門家はこう応答します。

27 節「すると彼は答えた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

これは、旧約聖書にある申命記 6 章 5 節とレビ記 19 章 18 節を組み合わせた答えです。神様への愛と隣人への愛、この両方を守り行うことが永遠のいのちを受け継ぐために必要だと律法の専門家は考えていました。この答えに対してイエス様はこう返します。

28 節前半「イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。」

イエス様ご自身もマタイやマルコの福音書の中で最も大切な戒めとして、神様への愛と隣人への愛を語られているように、この律法の専門家の答えは正解でした。(マタイの福音書 22 章、マルコの福音書 12 章) しかし、イエス様は律法の専門家にさらにこう命令されました。

28 節後半「それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」

この 28 節のイエス様の言葉には、律法の専門家が 25 節で言った「永遠」や「受け継ぐ」という言葉がないことから、律法の専門家とイエス様の対話が実はすれ違っていたことに気づかされます。

この対話のすれ違いの理由は「永遠のいのち」に対するイエス様の理解と、律法の専門家の理解が違ったからです。

律法の専門家にとって永遠のいのちとは「受け継ぐ」とあるように、未来に律法を守った報いとして神様から与えられるものでした。つまり、自分の正しい行いによって神様から褒美として受け取るものでした。

しかし、イエス様にとって永遠のいのちとは、ヨハネの福音書 17 章 3 節に「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」とあるように、今地上を生きる私たちと神様との愛の交わりの中にあるものでした。

つまり、自分の正しさによって受け取るものではなく、イエス様から罪赦された者として、イエス様との交わりの中で、イエス様から受け取り続けていくものでした。

それだけではありません。ヨハネの福音書 6 章 47 節に「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」とあるように、イエス様を信じ、イエス様の言葉にとどまっている人は、この永遠のいのちをすでに持っているのです。

ですから、イエス様はここまで律法の専門家と対話することで、イエス様の言葉にとどまるように、神様を愛し、隣人を愛しなさいという神様の言葉に生きるように、神様との愛の交わりの中に入るように、律法の専門家を招かれていたのです。

「わたしを信じ、わたしと同じように神様を愛し、隣人への愛に生きてみなさい。そうすればあなたは神様の愛を体験するだろう。そのように生きるあなたの中には、もうすでに神様から与えられた永遠のいのちがあるのだ。」このようにイエス様はおっしゃりたかったのではないかと思います。

ですから、ここで律法の専門家は「分かりました」とだけ言って、イエス様の言葉の通りに、神様への愛と隣人への愛に生きればよかったのです。けれども、律法の専門家はこのイエス様の言葉に満足しませんでした。

29 節「しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とはだれですか」

ここから律法の専門家がなぜイエス様に永遠のいのちに関する質問をしたのかが分かります。彼は永遠のいのちを生きるよりも、自分の正しさを示したかったのです。自分は神様と隣人を愛している正しい人であるとイエス様に認めてもらいたかったのです。

イエス様は律法の専門家を永遠のいのちに導きつつも、最初からこの律法の専門家の偽善にも気づいておられたのでしょう。「それを実行しなさい」と、「あなた自身が神様の言葉の通りに生きているのか」と、律法の専門家に迫りました。

このようにイエス様に迫られて律法の専門家は、自分が本当に神様と隣人への愛に生きているのか心配になったようです。

「では、私の隣人とはだれですか」と、自分の隣人とはどこまでなのか、どのような人を愛したらよいのかと、隣人の範囲をイエス様に尋ねました。

当時の律法の専門家たちは隣人の範囲を、同胞であるユダヤ人と律法を守って生きている敬虔な人に限定していたようです。律法の専門家もこの自分たちが定めた範囲なら「私は隣人への愛に生きている」という自信があったのでしょう。

しかし、誰を愛するかを自分で選んでいる。そういう愛はイエス様の教える隣人への愛ではありません。私たちの中にも、もし誰を愛するかを自分で選んでいるそういう人がおりましたら、この後のイエス様のたとえを私と共に注意深く聞く必要があるでしょう。30節～35節をお読みいたします。

30節～35節 善きサマリア人のたとえ

30「イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行ったが、強盗に襲われた。強盗たちはその人の着ている物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行った。32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。33 ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。34 そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱した。35 次の日、彼はデナリ二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」

このイエス様による「善きサマリア人のたとえ」は、古来より様々な読み方が教会の中になされてきました。例えば、難しい言葉ですが、「寓喩的解釈」と言って、たとえの登場人物を聖書の登場人物に置き換えた読み方があります。

その読み方の中では、ある人がアダムで、強盗が罪や悪魔、サマリア人がイエス様、宿屋が教会と言ったように、イエス様が罪によって傷ついている私たちを救うということが、このたとえの中に隠されていると考えられています。この読み方も興味深いですが、本日はもう少し素直に聖書を読んでまいりたいと思います。

30 節を見ると、ある人がエルサレムからエリコという町へ下って行ったところ、強盗に襲われ半殺しにされたことが分かります。このある人とは、この後出て来るサマリア人とは違い、特別に何人と言及されていないことから、ユダヤ人であったと考えられます。

また、イエス様の時代このエルサレムからエリコへの道は実際に強盗が多い危険な道であり、エルサレムからエリコまでは直線で 30 キロくらいの距離であったようです。そのためエルサレム神殿で奉仕をしていた多くの祭司たちが本当にエリコに住んでいたようです。

その当時の状況と同じく 31 節では、ある人が倒れている道に向かって祭司が歩いて来ます。神様に仕える祭司だし助けるのだらうなと普通は思いますが、なんとこの祭司、半殺しにされている人を見て反対側を通り過ぎていきました。

これで本当に神様に仕える祭司なのかと思いますが、民数記の中には、19 章 11 節に「死人に触れる者は、それがどの人のものであれ、七日間汚れる」という規定と、19 章 13 節に「死人、すなわち死んだ人間のたましいに触れ、身の汚れを除かない者はみな、主の幕屋を汚す。その者はイスラエルから断ち切られる」という規定があります。

ですから、この祭司は死人に触れ汚れを身におびた場合、神殿の中に入れず働きが出来なくなってしまうので、半殺しにされ死んでいるように見えたその人を、助けないで避けたのだと思われます。

また、倒れている人を見て、もし生きていたとしても、関わりたくない、面倒を避けたい、自分の予定を優先したい。「いや、自分は神様のために生きているのだからしょうがない」と、助けないことを正当化する思いがあったかもしれません。

32 節のレビ人も同じような理由で助けなかったのでしょうか。なぜなら、レビ人も祭司と同じように神殿で働く人たちだったからです。そして、祭司もレビ人も律法をよく知っている人たちでした。

ここから、聖書の知識と愛の実践というものが、必ずしも結びついているとは言えないことが分かるのではないのでしょうか。聖書の知識はあっても愛がないということが現実であり得るのです。

私も祭司やレビ人のように、聖書のみことばを聞き、みことばを語り、みことばをよく知っているのに、そのみことばのとおりには生きていないということがないか。また、自分はその通りに生きていると思いついていないか。ということ改めて考えさせられます。

ところが 33 節～35 節を見ると、聖書の専門家ではないサマリア人が彼をかわいそうに思い助けたことが語られています。しかも、ただ助けただけでなく自分の出来る範囲の最大限の治療をし、また自分は乗っていた家畜から降りたのでしょう、その家畜に彼をのせ宿屋に連れて行って介抱しました。

そして、次の日にはデナリ二枚を宿屋の主人に支払いました。これは、一デナリは当時の一日分の賃金ですから、現代の日本の一日の賃金を一万円とすると、約二万円を惜しみなく支払い、そして彼が回復するまでにもっと費用がかかったら、自分が帰りに支払うとまで言ったのです。驚くべき隣人への愛です。

それだけではありません。サマリア人はこのイエス様の時代の時は、ユダヤ人と外国人の混血である異邦人として、ユダヤ人とは敵対関係にある民族でした。また、サマリア人はモーセ五書ならぬサマリア五書という聖典を持ち宗教的にも対立する民族でした。

このように、サマリア人はユダヤ人と民族的にも聖書理解にも違いがあり、ユダヤ人にとって隣人ではない人たちでした。しかし半殺しにされていた人を今持っている精一杯の力で助けたのです。同胞に対して見て見ぬふりをした祭司、レビ人とは全く違う、隣人への愛に生きたのがこのサマリア人でした。

36 節～37 節 行って同じようにしなさい

イエス様のたとえばここで終わり、再び律法の専門家にイエス様が質問します。

36 節「この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか」

イエス様は、祭司、レビ人、サマリア人、この三人の中で誰が隣人になったのかを問います。これは「だれが隣人なのか」ではなく、「だれが隣人になったのか」という問いです。

つまり、イエス様は私の隣人とは誰ですか、どこまでが隣人ですかと聞いた律法の専門家に、ここまでがあなたの隣人ですと教えるのではなく、隣人とはどのような人であるのかを、たとえを通して教えられたのです。律法の専門家はこのイエス様の問いに答えます。

37 節前半「彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です」」

正解ですが何だか遠まわしな言い方です。「あのサマリア人です」と言えばもっと分かりやすいはずですが。律法の専門家は普段見下していたサマリア人が、祭司やレビ人を差し置いて隣人となったということが、どうしても認められなかったのかもしれませんが。

ただ、あわれみ深い生き方が人を誰かの隣人とならせるということは、彼にも理解出来たようです。そして、イエス様は最後にこう言います。

37 節後半「するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

愛する隣人を選んでいた律法の専門家に対して、イエス様は対話とたとえを通して「隣人とはあわれみ深い愛の生き方によってなるのだ」ということを気づかせ、その愛に生きなさいと命じられました。

ですから、律法の専門家という立場があるから、自動的にだれかの隣人になるわけではないのです。

私も伝道師、教育主事という生き方を神様と教会からいただきましたが、それが私を自動的に誰かの隣人にするわけではありません。神様の愛を伝えながら、その神様の愛を自分自身もまたイエス様と共に生きる。その生き方が私をだれかの隣人とするのです。

皆さんにも神様から与えられたクリスチャンという生き方があります。クリスチャンとは「キリストに属する者」という意味です。しかし、クリスチャンだからと言って自動的にだれかの隣人になるわけではありません。神様を愛し、隣人を愛する生き方、「隣人になったサマリア人」のようにイエス様と共に生きる。それが皆さんをだれかの隣人とするのです。

敵を愛する

まとめます。ここまで律法の専門家とイエス様の対話、そしてイエス様のたとえから、誰が私の隣人なのかではなく、どんな人が隣人であるのかを見てまいりました。その中で「隣人とはあわれみ深い愛の生き方によってなるのだ」ということを、皆さんにもお分かり頂けたと思います。

また、ここまで共に聖書を読んできた皆さんもお気づきの通り、このたとえはサマリア人が敵対しているユダヤ人を助けたように、「**自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい**」(マタイの福音書5章44節)という、親しい友だけでなく自分を迫害する敵をも愛する、イエス様の愛を教えています。

私も自分に良くしてくれる人、自分が助けたいと思う人には、善い行いをすることができます。自分の定めた範囲なら人を愛せます。しかし、自分に敵対的な人、自分を憎む人に対して、言葉では優しい言葉をかけることは出来ても、イエス様の愛をその生き方で示すということが完全には出来てはいません。

自分は「隣人となったサマリア人」ではなく、今日見てきた律法の専門家、祭司、レビ人と同じ「隣人とならなかった教師」であることを自覚させられます。神様の言葉を人々に教えながらも「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」と言われたイエス様の言葉を守れない、すなわち神様に敵対している自分に気づかされます。

しかし、このような神様と敵対していた私のためにイエス様は十字架上で死んでくださいました。主イエス・キリストこそが敵であった私にあわれみの愛を与えてくださった私の隣人であったのです。

私はこのイエス様の敵をも愛す、十字架の愛に押し出されて、イエス様に倣って生きる者でありたいと思います。37節「あなたも行って、同じようにしなさい」と言われたイエス様の言葉に生きる者でありたいのです。

「あなたも行って、同じようにしなさい」この言葉はイエス様の救いをまだ知らない律法の専門家にとっては、自分は義人だと、神様を愛し、隣人を愛していると思っていた、彼の自己義認を打ち砕くためのものでした。敵を愛さないことは、神様を愛していないのと同じことであるということを彼に自覚させるためのものでした。

しかし、「あなたも行って、同じようにしなさい」この言葉は自分の正義を打ち砕かれた者、イエス様の十字架で罪を赦され新しく生まれ変わった者、神様への愛と隣人への愛に生きようとしている者、永遠のいのちを生きている者にとっては、イエス様からの促しであり、私たちの背中を優しく押し出す、愛のひと後押しなのではないかと私は思います。

イエス様は私たちに「わたしが十字架上で敵を愛したように、かつてわたしと敵対していたあなたのことにも愛したように、わたしがあなたの隣人となったように、どんな人でも愛する生き方、たとえ敵であっても愛する生き方を、すでに永遠のいのちを受け取っている『あなたも行って、同じようにしなさい』」そう、私たちの背中をポンとひと押しして下さっているのではないのでしょうか。

このイエス様への応答として、最初の一步として、イエス様の愛の中に生かされている者として、今週一週間、自分を愛する人を愛するだけではなく、だれか困っている人がいたら声をかけてみる。だれかのために祈ってみる。だれかのために生きてみる。だれかの隣人となる。このイエス様の愛を、イエス様と一緒に、私たちみんなで歩み進めてまいりましょう。

お祈り

あわれみ深い天の父なる神様。本日は隣人となったサマリア人のたとえから、隣人を愛するとはイエス様の示された敵への愛を生きることであることを知りました。私たちにとって避けたい隣人とは誰でしょうか。私たちにとっての敵とは誰でしょうか。イエス様のように敵を愛するという事は、イエス様から永遠のいのちを受け取ったクリスチャンにとっても非常に難しい愛の実践です。

しかし、イエス様の十字架によってきよめられた者として、そして、なによりも神様と敵対していた私たちをも愛して下さったイエス様の愛に押し出されて、このイエス様の愛をイエス様と共に生きる者と私たちをならせてください。このお祈りを主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。